

南アフリカを起点として始まったオーストリッチ産業は、1980年代後半から革、肉、羽等を対象としたニュービジネスとして世界的な注目を浴び、畜産史上例をみないほど急激に拡大しており、日本においても市場に根付く土壤が着々と出来上がっています。



なぜ今オーストリッチ(ダチョウ)なのか

◆ 国として抱える課題 ◆

- ・低い飼料自給率
- ・国土の有効利活用

◆ 農業が抱える課題 ◆

- ・市街地との共生(畜産公害)
- ・高齢化・労働効率
- ・生産性・所得の向上

◆ 地域が抱える課題 ◆

- ・地域産業の高度活性化
- ・未利用資源の再利活用
- ・地産地消の促進

- ・草主体の純国産粗飼料での生産。
- ・環境適応能力が高く、休耕地や休遊地、中山間地での飼育生産。

- ・鳴かない、糞尿が少ない、臭わない。
- ・手間がかからず、労働効率が高い。
- ・増殖率が高く、飼育コストが少ない。

- ・既存産業と連携することによる製品化。
- ・食品製造副産物の飼料としての再利用。
- ・新産業による流通消費構造の創造。

■飼育生産における特性■

- ① 繁殖 一般的にオス1羽とメス2羽のトリオで飼育。メス1羽が年間40個産卵。適切な栄養管理と環境設定が重要で、繁殖成績に影響します。
- ② 孵化 種卵は約42日間で孵化。孵化を成功させるには技術が必要です。
- ③ 育雛 初生から3ヵ月齢までは極めてデリケートな育成期間です。ストレスや栄養障害がヒナの育成率に影響します。
- ④ 育成 3ヵ月齢以降の飼育は、施設も簡易で飼いが易く手間がかかりません。

繁殖メス1羽(頭)あたりの1年間の生産効率の比較

	妊娠・ 孵化日数	繁殖数	飼料要求率	出荷までの 飼育日数	生産効率
オーストリッチ	42日	40羽	6.12	12ヵ月	1400kg 35kg×40羽
牛	280日	1頭	18.5	30ヵ月	270kg 270kg×1頭

飼料要求率: 肉1kgを生産するのに必要な濃厚飼料量



帯広畜産大学で飼育しているダチョウ

■高い飼料効率と生産性■

- ① 非常に高い食肉生産能力 (餌の栄養効率が、牛の10倍。産卵寿命10年以上。)
- ② 低カロリー、高タンパク質でヘルシー食品 (赤肉でミネラル豊富。軟らかく、くせがない。)
- ③ 最高級皮革として定着 (日本は世界最大の消費市場です。)
- ④ その他付加価値の高い生産物 (オイル、羽根、卵、卵殻、骨など特有の品質です。)

食肉の栄養比較

	カロリー	タンパク質	脂 肪	脂肪酸	コレステロール
オーストリッチ	97	22 g	2 g	0.0 g	58 mg
鶏 肉	140	27 g	3 g	0.9 g	73 mg
牛 肉	240	21 g	15 g	6.4 g	77 mg
豚 肉	275	24 g	19 g	7.0 g	84 mg



冬のダチョウ(帯広畜産大学)